

●略歴

1948年、京都に生まれる。67年、京都府立朱雀高校鳥羽分校（定時制）卒。製本屋、郵便局、印刷会社、ウェ이터などの職を経て、71年、ヨーロッパ放浪。96年、立命館大学文学部（日本大学専攻）に社会人学生として入学。季刊『銀花』（文化出版局）に肉筆詩画を各々5,000枚制作。個展は多数開催。出版物は詩画日記『ぼくはコペルニクスだ』（亀山社中）、詩画集『けんけん』（アスカ）『山田喜代春詩画集 すきすきずきずき』（東方出版）などとオリジナル限定木版画集。

〒606京都市左京区浄土寺下南田町52-21

ぼくは大学一年生

1997年12月15日 初版第1刷発行

著 者 山田喜代春

発行者 今 東 成 人

発行所 東方出版(株)

〒543-0052大阪市天王寺区大道1-8-15

☎06-779-9571 振替00940-9-20522

印刷所 亜細亜印刷(株)

ISBN4 88591 548 1

落丁・乱丁本はおとりかえします。

¥1300

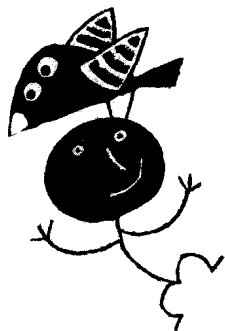
ぼくは
大学
一年生

山田喜代春

東方出版

ぼくは大学一年生

目次



社会人入試 試験は緊張で手が震えた 10

入学式 親のような気持ちで列席 14

二足のわらじ 休息削って「時間」と闘う 18

英語 読解はとても歯が立たず 22

朝鮮語 童・民謡に土俗のにおい 26

図書館 喜びと興奮の本の森探検 30

詩と絵と学問と 幼児の体験から今… 34

単位 肩、腰、胸に食い込む重石 38

私語 携帯電話と同じ音の公害 42

定期試験 30年ぶりの勉強 頭空回り 46

飲み会	本場韓国料理に舌つづみ	50
前期授業を終えて	励まし合って落ちこまず	54
夏休み	少年の日追想させる響き	58
社会人入試に思う	学校教育に風穴あけるか	62
読書	身の回りに小宇宙つくる	66
エメール	痛感 語学は若いうちに	70
海外渡航	雄大さ知った格安ツアー	74
成績発表	外国語は選択科目にして	78
こぼれ話	入学から半年、思いさまざま	82
社会人学生紹介	それぞれにビジョン持ち	86

続社会人学生紹介 とても元気のいい女性たち 90

名前の呼び方 不快このうえない「ちゃん」 94

講演会 地域の人たちにぜひ公開を 98

生涯学習 低い25歳以上の在学者比率 102

疲労困憊 休日なし、資料枕に眠りたい 106

辞書の話 入学してから7冊を購入 110

独学 独りよがりを防ぐには… 114

年賀状のことなど 読みやすく自慢を入れず 118

棄権 年末の英語試験やむなく 122

蔵書印・蔵書票 愛書家の心情伝わる警句 126

研究発表	レジュメでわかる工夫の跡	130
石川啄木	今もこちらに詩の矢射る	134
言葉	メツチャ怖いその威力	138
年について	ウルマンの「青春」に共感	142
1年を振り返って	負担を超えた愉悦がある	146
定時制高校	募集の停止は時代に逆行	150
春休み	計画どおりに進まぬ語学	154
浅原才市	一万編にのぼる念仏の詩	158
大学と家庭	家族の協力は必須条件	162
別天地	心の翼広げ学問の風に乗り	166



ぼくは大学一年生

試験は緊張で 手が震えた

立命館大学は以前より、一芸入試など独自の入試制度を採ってききましたが、今年度（一九九六年）、文部省との二年余の交渉を経て、全国にさがけ「社会人特別入試」を実施しました。社会人への門戸を開くこの画期的な入学試験に、近畿地方はもとより、二十二都府県より五百五十六名の出願がありました。

ぼくはこの募集を、今年二月の新聞広告で知り、すこしためらいはあったものの、文学部に出席しました。

入学試験は、三方式の中から選ぶ選択制で、ぼくは作文と面接だけの「自己推薦特別選抜」を、迷うことなく選びました。英語が国語を選択する方式もありますが、これは論外。

「自己推薦」の第一次試験は、テーマ作文が二編出題されました。自宅で仕上げて郵送するため、気の済むまで推敲すいこうができ、少



なからず手応えはありました。そして、無事通過。第二次試験はテーマ作文と面接で、大学の教室で行われました。

試験官を前にするのは、高校のときの初級国家公務員試験以来、実に三十年振りです。長女から筆箱を借りて臨みましたが、年がいもなく落ち着きをなくしていました。それに、自分に都合のよい予測に反して、大教室は大入り。その受験者の多さに、ぼくはたいそううろたえてしまいました。

ぐらつく気持ちを鎮める間もなく、試験用紙が配られ、指示に従います、名前を書こうとしたとき、我ながら啞然とする事態が生じたのです。過度の緊張で手が小刻みに震え、名前を書くことができないのです。きつつきが幹を打つように、鉛筆は解答用紙をつつくように打つだけです。鉛筆を握った手は、ますます硬直

するばかりです。

この予期せぬ事態に、ぼくは慌てふためき「白紙」「中途退席」という言葉が脳裏をよぎり、問題用紙の活字を追う目は、視点が定まりません。窮したぼくは、時間にせかされながら、メモ用紙に落書きをはじめました。その無意味な線が、黒い固まりになったとき、ようやく、緊張の糸がほぐれはじめました。後は、テーマ作文に全力投球。書き終えたのは終了の二分前でした。それから、昼食をはさんでの面接を終え、帰りのバスの座席に身を沈めたとき、からだから力が抜けていきました。

日を置いて、合格通知証を手にしたとき、喜びがじわつと湧いてきました。そして、ようやく緊張の呪縛から、完全に解き放されたように感じました。

親のような気持ちで 列席

入学式の前日は、開催していた個展の最終日で、その日、あわただしく画廊へ駆け込んだ知人が、一息つくや、就職したと告げました。彼女のユニークな経歴に関心をもっていたぼくは、興味津々すかさず聞き返しました。

「どんな仕事です」

「立命館大学の講師です」

同じ大学に就職と入学。それも年上のぼくが学生です。この奇遇に互いに笑うばかりで、祝いのことばは言わずじまいでした。

ところで、学業と仕事の並走に、見切り発車することを思えば、笑っていられるのは、今日限りかもしれないとの思いもありました。

そして、明くる四月一日。個展の片付けもせず、疲れきったか

